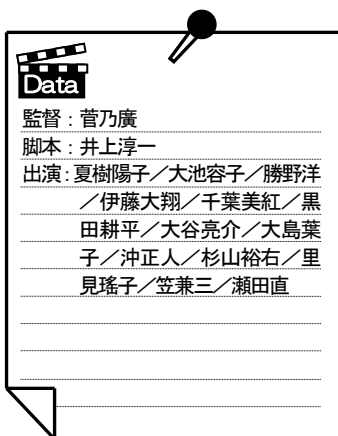




👁️👁️ みどころ

3. 11の「震災モノ」映画はドキュメンタリーを含めて数多いが、『戦争と一人の女』（12年）を監督した井上淳一が書いた脚本は秀逸。1945年、1966年そして2011年の3. 11東日本大震災の前後。それぞれ、原発に絡まる四つの時代、四世代にわたる家族は、それに翻弄されながら、いかに生きてきたの？

大島渚監督のデビュー作『愛と希望の街』（59年）のタイトルを平仮名にして使ったのは、なぜ？それをしっかり考えながら、さらにできればメモを取りながらしっかり鑑賞し、壮大な「鎮魂の物語」に酔いしれたい。本作は必見！

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— *

■四つの時代、四世代にわたる家族■

本作は3. 11東日本大震災をテーマとしたいいわゆる「3. 11映画」の1つだが、ドキュメンタリー映画ではなく、堂々たるストーリーをもった鎮魂の物語だ。本作では、1945年、1966年そして3. 11東日本大震災が発生する前の2011年、発生した後の2011年という四つの時代が、時間軸を交叉させながら描かれる。戦後69年となつた2014年5月の今、安倍総理が固執する「集団的自衛権」の議論が新聞紙上を賑わしているが、1945年から60年までの15年間の「戦後復興」の時代を終え、1964年の東京オリンピックを成功させた日本は、池田勇人内閣、佐藤榮作内閣と続く自民党政権のもと、高度経済成長路線をひた走りに進んでいった。そんな中、石油に変わるエネルギーとして当時不可欠と考えられたのが原子力発電だ。

1966年、福島県双葉町では、原発建設に反対する住民は草野英雄（沖正人）1人だけになっていた。妻の弥生（大島葉子）はそんな夫を見限って既に離婚していたため、一

人娘の愛子（大池容子）は16歳の今、孤立した父親と共に苦しい生活を続けていた。しかし、英雄はどうしてそんなにかたくなに原発建設に反対するの？それを読み解くには、その21年前、英雄が15歳だった1945年の敗戦直前の時代に遡らねばならない。

他方、1966年当時16歳だった愛子も、45年経った2011年の今は61歳。夏樹陽子演ずる西山愛子（旧姓草野愛子）はまだまだ若くベッピンだが、既に孫の西山怜（千葉美紅）はあの時の愛子と同じ16歳になっていた。

本作導入部には、3. 11東日本大震災の喪失感でいっぱいになっている、その怜が中年のサラリーマンに2万円で身体を売るシークエンスが登場する。今ドキこの程度の不良少女によるこの程度の売春行為は珍しくないが、ここで面白い(?)のは、怜が3. 11の被災体験を語りつつ、16歳の少女とのエッチは淫行にあたりと脅してプラスαの金をせびること。怜は一体どこから、こんな知恵が湧いてくるの？フランソワ・オゾン監督の『17歳』（13年）（『シネマルーム32』掲載予定）で観たのと同じように、怜はそのお金を一体何に使うの？そもそも、何のために売春行為をやっているの？そして、怜の父親・西山信哉（すなわち、愛子の長男）は、こんな怜の行動を知っているの？ちなみに、怜は2011年の3. 11東日本大震災のとき、ホントに震災の現場にいたの？

■□■「原子力 未来の 明るいエネルギー」の標語をいかに■□■



◎「あいつとぼくのまち」映画製作プロジェクト

1966年当時の、原発が建設される前の福島県双葉町は田舎町だが、それでも一応商店街はあったらしい。そこに大きくかかっている看板の標語は「原子力 未来の 明るいエネルギー」というものだが、これは原発推進の標語に応募し入選した、愛子の同級生である奥村健次（伊藤大翔）の作品だ。この程度のもので入選だから、応募数もレベルも大したものではないことがわかるが、多分これは原発についてなんの抵抗感もない健次なればこそ素直に思いついたのだろう。

それに対して、終戦直前、原子爆弾という新兵器を発明してアメリカをやっつけるために天然ウランを採掘するべく、学徒動員で来る日も来る日も採掘場でつるはしをふるっていた草野英雄が1966年の今、原発建設に拒絶反応を示したのは当然だ。そんな最高の軍事機密をあの時淡々と教えてくれたのは、採掘現場を指揮している加藤大尉（瀬田直）だったが、彼はなぜ英雄にそんなことを教えてくれたの？何事もクールに考える彼は、帝国軍人であったにもかかわらず「日本は負ける」という大胆予想までも……。さらに、東京から福島県石川町の採掘現場に加藤大尉が飛ばされたのは何らかの事情があったはずだが、まさかそんな帝国軍人と自分の母親・草野芙美（里見瑤子）が道ならぬ関係に陥っていたとは……。これでは、英雄少年が人間不信、大人不信のみならず、原発不信、国家不信に陥ったのは仕方ない。

■□■あちらは母親が自殺！こちらは父親が自殺！■□■

15歳の草野英雄少年の父親は職業軍人として名誉の戦死を遂げていたから、大日本帝国軍人の妻たる者は生涯、夫の英霊を奉り孤闘を守っていくのが当然。しかるに、英雄の母親・芙美は、加藤大尉と今で言う「不倫関係」に陥ったうえ、それが町中にバレてしまったから大変だ。敗戦を告げる天皇陛下の「玉音放送」を聞かされた英雄が、ある日家に帰ると、英雄の目の前には首つり自殺を遂げた芙美の姿が……。

他方、1966年の今、双葉町で唯一人かたくなに原発反対の姿勢を貫く英雄に対しては周りの住人からはもちろん、役場や有力者たちから執拗な説得活動が続いていた。その結果、ついにある日、英雄は補償金を貰って田畑を売り渡すことに合意するハンコを押したから、これにて原発建設はOK。英雄も多額の補償金をもらって、以降悠々自適の生活を……。そんな展開もありかなと考えていると、そうではなく、それまで村八分にされる中で酒浸りの生活を続けていた英雄は補償金を貰った後、死体となって海岸で発見されたから、大変。愛子はひとりぼっちになってしまうことに。

そんな愛子を支えてくれたのが、「原発推進」の標語に応募するなど無神経に原発推進の立場をとっていた同級生の奥村健次だったのは皮肉だが、その当時愛子が健次に淡い恋心を抱いていたのはまちがいないさそうだ。しかし、父親を失った16歳の愛子はその後、どこでどんな生活を？他方、健次の方は？

■□■再会はFacebookから！『潮騒』の再現は？■□■

2011年の3.11東日本大震災前、61歳になった愛子は福島県南相馬市で夫の西山徹（大谷亮介）、長男の西山信哉夫妻、そして孫娘の怜らと共に幸せに暮らしていた。しかし、16歳のときに父親を失った愛子は今も原発問題を含む社会問題から目をそらすことができず、今パソコンのYouTubeで見ているのは、チュニジアのジャスミン革命の様子。61歳でYouTubeに興味を示すのは偉いものだが、さすがにFacebook

okを使いこなすのは無理なようで、孫の怜にそのやり方の伝授を乞うと、意外に簡単だった。「友達になる」ボタンをクリックすると、昔顔なじみだったあの人、この人、とすぐに連絡できるようになるから便利なものだ。もっとも、そんな使い方がどんどん広がると、同窓会に名を借りた不倫騒動があちこちで……。そんな心配はまるで他人ゴトであるかのように、愛子はパソコン上に映った健次の写真に向けて、「友達になる」ボタンをクリック！

他方、奥村健次は愛子と別れた後、普通に結婚し普通に子供が生まれたらしいが、親も東電なら息子も東電という東電一家になっていた。そして、健次の方は40年間無事に勤め上げて定年退職したものの、長年現場で働いていた息子の孝之の方はガンのため、今瀕死の状態に。「きっと、この原因は東電の放射能だから、僕が死んだら裁判をしてでも、東電から賠償金をとってくれ」というのが孝之の遺言だったが、健次は「勝てないケンカをやっても……」と消極的だったため、妻の小百合と意見の対立が……。そんな愛子と健次の2人が今、45年ぶりに喫茶店で再会すると、さて、その先は……？

ちなみに、三島由紀夫の小説『潮騒』では、暴風雨の中、小屋に入った新治と初江との名シーンが登場する。これは吉永小百合＋浜田光夫版（64年）でも、山口百恵＋三浦友和版（75年）でも共に名シーンになったもので、「この火を飛び越してこい」の言葉は特に有名だ。しかし、愛子の父親が海岸で死体となって発見された数日後、健次の自転車に乗って海岸に出かけた2人は海の中に飛び込み、全てのストレスを発散させた後、共に入っていった漁師小屋の中で一体ナニを……。？そこでは、健次の口から「なんか潮騒みてえだな」のセリフが飛び出す中、女の愛子の方が積極的な行動を示し、結局若い2人が結ばれることになる。本作では、そんな『潮騒』ばりの、みずみずしいシーンもしっかり鑑賞したい。

■義援金募金詐欺の、この若者に注目！■

今でも、毎年10月になれば「赤い羽根」募金が年中行事になっている。募金そのものは、募金活動に従事する側も、募金する側も尊い行為。したがって、3.11東日本大震災直後も日本国中から義援金が大量に集まったし、日本国中で募金活動が大々的に展開されたが、これはまさに日本国民の一致団結した姿を示す尊いものだ。ところが、その一方でまかり通るのが、義援金募金詐欺。その実態はあまり明かにされることはないが、『戦争と一人の女』（12年）（『シネマルーム30』199頁参照）を監督し、本作の脚本を書いた井上淳一は、堂々と義援金募金詐欺を職業としている（？）面白いキャラの若者・沢田（黒田耕平）を本作に登場させた。

大震災後、愛子を失い、家を失い、多くの友人を失った喪失感の中、今は公務員宿舎の父親の家で生活しながら、外では売春行為までしている怜が、そんな沢田に興味を示したのは当然だ。ところが、沢田は自分のラーメン代はもちろん、後ろについてきた怜のラーメン代も募金箱の中から出したから、怜はビックリ！これって義援金募金詐欺では？その

問いに対して、沢田は「ああそうだよ」とシャーシャーと答えたから、怜は二度ビックリだ。ところがその数日後、今度は怜もピンクの募金箱を持って沢田の隣に立ったから、今度は私がビックリ。すると、怜の募金箱にはたちまち義援金が……。また、そこで怜が震災直後の悲惨な体験を熱く語り始めると、年輩の女性は「もういいわ」と遮った上、1000円札(?)を入れてくれたから、怜は「今夜は焼き肉にいくよ」と大見得をきることに。

世の中の常識で判断すれば、沢田の行為はもちろん、それに便乗して大金を募金させた怜の行為も悪いことで、刑法上の詐欺罪に該当することは明らかだが、さて、沢田も怜もなぜそんな行動を？また、井上淳一の脚本でも、菅乃廣監督の演出でも、なぜそんな2人のことを堂々とスクリーン上に……。それは、悲惨な被災体験をしたものでなければわからない！そうやってしまえば身も蓋もないことになってしまうので、そこは本作を鑑賞しながら各自じっくり考えてみたいものだ。

■■この新人女優に注目！■■

本作で怜を演じた千葉美紅は『戦場と一人の女』では、中国からの帰還兵（村上淳）にお米をもらえると騙された挙げ句、レイプされ殺される少女役を演じた若手女優で、某プロデューサーから「大竹しのぶの再来」と絶賛されたらしい。本作導入部のラブホテル内では、そんな彼女のみずみずしいオールヌード姿も一瞬登場するのでお見逃しなく。



そんな大胆演技にも感心させられたが、**◎「あいときぼうのまち」映画製作プロジェクト**

南相馬市にある自宅で、震災前、幸せに暮らしている祖父母、両親の前でホルンを吹いてみせる等の、幸せな家族関係の演技もまずまず。そして、何より感心させられたのは、震災後の売春行為や、沢田との義援金募金詐欺行為等に見る、屈折した少女の感情表現の見事さだ。もっとも、三世代にわたる大家族の中で幸せに暮らしていたのに、Facebookでお友達になった健次と祖母の愛子が「密会」していることに、どうしてそんなに興味を持つの？南相馬市といっても狭い町だから、そりゃ急に愛子がおしゃれをして出かけていく回数が増えたり、お土産を持って帰ってきた時いい匂いがしたりすれば、敏感な年頃女の子なら、アレっとなづいてもおかしくはない。しかし、私に言わせれば、問題はその後の探偵まがいの尾行だ。

■□■探偵まがいの尾行はいかななもの・・・？■□■

スーパーの駐車場に互いの車を置き、健次の車に2人で乗り込んでのラブホテル通いはそりゃ褒められたものではないが、2011年という時代ともなればそれくらいは見逃してやってもいいのでは？まして、健次は妻・小百合との離婚、愛子との再出発まで真面目に考え、それを告白しているくらいだから、16歳の孫娘がそこまで口出ししなくてもいいのでは？そう思っていると、ラブホテルでのコトを終えた2人は、愛子の提案によって、あの「なんか潮騒みてえだな」の思い出の場所に行ってみようということになったが、まさかその一部始終を自転車で尾行してくる孫娘に見られていようとは・・・。

もちろん45年後の今、あ那时的の漁師小屋はなくなっていたから、2人は童心に戻り、キャーキャー言いながら海に石を投げ込んでいただけだが、それを防波堤から1人見つめる怜の心境は？怜はそのいらだたしさを駐車している健次の車にぶつけ、タイヤを蹴飛ばしたが、ふとドアを開けるとカギがかかっていたのでつい怜のイライラはエスカレート。差し込まれていたエンジンキーを抜いてしまうと、それを大きく振りかぶって遠くへ投げ捨ててしまったから、この車はJAFを呼んで助けを求めない限り使用不可能になることに。「ざまあみろ」との言葉が怜の口から出たかどうかは知らないが、少なくとも気持ちちはそうだったはず。そして、自転車に乗ってその場を去ろうとしたところ、ドーンという音がしたかと思うと地面が大きく揺れ、海からは大津波が。海岸で無邪気に遊んでいた愛子と健次も驚いて車まで逃げてきたが、さてキーは？

あの3.11東日本大震災に伴う津波では、高台へ逃げるスピードの一瞬の差が生死の境目になったことは周知のとおり。怜は自転車をこいで必死に高台を目指したが、さて頼みの車がつかえない愛子と健次は・・・？3.11東日本大震災によって生き残った住人たちも多くのを失ったが、怜のように愛子を失ったのが地震や津波のせいではなく、自分のせいだとなると・・・。

■□■怜と沢田はなぜこんな行動を？■□■

本作にみる怜と沢田の行動と会話は、今ドキの若者同士の会話とは思えない程の趣きと奥深さがある。それはとりわけ沢田に顕著だが、沢田が最初に怜に語った、「自分は原発ジプシーとして、各地の原発を転々としながら原発の補修作業に従事していた」という身の上話はどうもウソっぽらしい。そんなウソ話をしながら、沢田がずっと義援金募金詐欺にこだわっているのは一体なぜ？

そんな沢田に免許証を持っているかと聞き、一緒にレンタカーに乗って怜は被災した昔の家に赴いたが、その時の沢田の身の上話は「俺は売れないモノ書きだ」「お前と付き合っているのも取材対象として面白いからだ」というものだったが、どうもそれもウソらしい。怜はそんな沢田と共に、今なおガイガーカウンターが放射能の高い数値を示す被災地から大量の落ち葉をビニール袋に詰め込んで、両親と共に過ごす公務員宿舎に戻ってきたが、これは一体何のため？

松本清張の原作にして日本映画最高の傑作『砂の器』（74年）では、列車の窓から白い紙片を撒き散らす若い女性（映画では島田陽子が演じていた）が登場し、それが事件解明に向けて一つの大きなポイントになったが、美しい景色の中をひた走る列車の窓から風に乗って舞い散る紙吹雪は美しく、情緒溢れた風景だ。それと同じように、高層ビルの屋上から舞い落ちる大量の落ち葉も、後の掃除は大変だが、その一瞬の風景は美しい。現に、ある子供はそれを拾って大事そうに持ち帰っていたが、実はそれが大量の放射能で汚染された枯れ葉だとわかれれば・・・。

日本の警察は優秀だから、そんな迷惑行為をした2人の少年少女はすぐに事情聴取を受けることになったが、ビルの屋上では沢田が怜の行為を止め、怜に代わって沢田が枯れ葉を撒き散らしていたから、怜はすぐに釈放。しかし、沢田の方は大目玉を食らうことに。そこで明らかになったのは、沢田という名前もインチキで、本名は秋山ひろあきだということだが、なぜ、沢田はそんな偽名まで？さらにそもそも、怜と沢田はなぜそんなことを・・・？

■タイトルの意味は？■

本作のタイトル『あいときぼうのまち』は、大島渚監督の1959年のデビュー作『愛と希望の街』を平仮名にしたものらしい。プレスシートにある『脚本：井上淳一 OFFICIAL COMMENTS』によると、「大島渚は当初、階級差は決して埋まることはないというテーマのこの作品を『鳩を売る少年』と名付けていた。しかし、会社から反対され、大島は反語的にこのタイトルをつけた。だから、実際に映画の中で描かれている世界は『愛も希望もない街』らしい。そして、井上は、「この映画のタイトルを付けるとき、どうしてもこれ以上のものは思い浮かばなかった」らしい。また、「平仮名にしたのは、55年前よりいまの方がより問題がよりソフトになり見えにくくなっているのではないか、と思うから」らしい。

私は、大島渚作品を観ていないのでこの点について何も言えないが、本作は決して「愛も希望もない街」とは思えない。むしろ、ラストのあっと驚くタネ明かしの展開を観ていると、「愛と希望の街」という前向きなメッセージの方が強い。しかして、井上は続けて、「ただ、それだけではない。やはり、『あいもきぼうもないまち』ではなく、『あいときぼうのまち』に住みたいと僕は思う。それは、この作品の底に流れる、忘れてはいけない、けど、赦してもいい、という祈りにも似た願いに通じている」と書いているから、「なるほど」と納得。本作はタイトルどおり、あの大震災にもかかわらず、「あいときぼうのまち」を描いているわけだ。

■愛子の絶望感と喪失感に救いが！これぞ愛と希望！■

去る4月16日に発生した、韓国的大型旅客船セウォル号の沈没事故から1カ月が経過

した。多数の乗客や乗務員を放り出したまま、1人で船を逃げだしている船長の姿に全世界は驚かされたが、時間の経過の中、その被害状況が少しずつ語られている。3. 11東日本大震災でも直後の混乱期が終わった後、少しずつ一人一人がどのような状況下で死亡したのかが明らかにされていった。しかして今、怜の父親に知らされたのは、あの日、愛子から命を助けられたという老人の話だ。

あの時、車のキーがないことに健次も愛子も一瞬動揺したが、2人は何とか徒歩で高台に向けて逃げ出すことができたらしい。ところが、2人だけなら何とか避難ができたにもかかわらず、愛子は後ろからトロトロと歩いてくる老人を助けるため、わざわざバックし、その手助けをしている中、自分自身が津波に巻き込まれ犠牲になったというわけだ。「個人情報保護法」という名の悪法がまかりとおっている(?)ため、愛子に命を助けられた老人はなかなか愛子の名前や住所、遺族に辿り着くことができなかったが、今やっと辿り着くことができたので、お礼の言葉を述べに来たというわけだ。

それを父親から聞かされた怜は、「すると、おばあちゃんを死に至らしめたのは私ではない」ということがわかったから、一気にその心の中は・・・?スクリーン上には、その後1人で高台へ行き、愛子の写真を置き、ホルンを演奏する怜の姿が描かれるが、きっと、その心の中は「愛と希望」でいっぱいにな・・・。

■□井上淳一の脚本に感心！今後の若松組の継承に期待！■□

プレスシートによると、本作が監督デビュー作となった菅乃廣は福島県出身。「20数年前、死が迫っていた父親が呟いた一言『この奇病は昔原発で浴びた放射能が原因かもしれない』をきっかけに、いつか原発を描こうと思っていた菅乃は、3. 11でその思いを新たにすることになったらしい。したがって、「資金集めからキャスティング、スタッフィングまで、この映画は監督自らがかけた汗と執念の結晶である。切れば血が吹き出るような演出は、福島県出身でなければ出来なかったであろう。そういう意味でも、本作は他の3. 11映画と決定的に違っている」というプレスシートの説明にも説得力がある。

他方、本作の脚本を書いた、若松孝二監督の弟子でもある井上淳一は『東電とケンカするような映画がやりたいと言いながら、叶わずに死んでいった師匠の、弔い合戦のつもり』でこのシナリオを書いたと語る」と書いてある。本作鑑賞前にチラシを読んだ時は、四世代にわたる家族のドラマはあまりにもややこしそうだと心配したが、プレスシートに書いてあるとおり、「四世代にわたる家族のドラマを錯綜させ、交錯させ、奇跡のラストへ収斂させていくシナリオは見事という他ない」。プレスシートにはさらに、「撮影もまた福島県出身である鍋島淳裕(『ヘブンズ・ストーリー』『軽蔑』『戦争と一人の女』など)。鍋島の福島を見つめる目もやはり、あたたかく、切ない」「彼らが描く、福島の過去、現在、そして、未来。本年度、最も目が離せない一本であること間違いなし」と書いてあるが、まさにそのとおりだ。